

第10回「いのちの授業」大賞 受賞者一覧

受賞名	タイトル	作者氏名	学校名	学年
大賞(知事賞)	「みんなでまってるね」	近藤 紫万	川崎市立金程小学校	1年
教育委員会賞	「私の大好きなおじいちゃん」	伊藤 すみれ	中井町立中村小学校	6年
神奈川新聞社賞	「夜に輝くセミを見て」	加藤 巧海	平塚市立真土小学校	6年
tvk賞	「使命」	山野 弥花	南足柄市立岡本中学校	2年
県PTA協議会 会長賞	「病気になってわかったこと」	鈴木 壮	茅ヶ崎市立東海岸小学校	4年
ともに生きる社会 かながわ憲章賞	「一人一人の人権が尊重される社会へ」	渡邊 恵	三浦市立初声中学校	1年
優秀賞	「今を、生きる。」	石坂 まり	伊勢原市立中沢中学校	2年
優秀賞	「母牛が教えてくれたこと」	堀内 桐子	神奈川県立相原高等学校	1年
優秀賞	「父への思い」	諸星 瑠花	大井町立大井小学校	5年
優秀賞	「食べることは生きること」	村田 弘乃介	平塚市立港小学校	3年

大賞

みんなでまってるね

川崎市立金程小学校

一年 こんどう しま

わたしが二さいのとき、おとうとの「たいち」がうまれました。たいちは、うまれてすぐ、はいにあながあいていることがわかり、にゆういんしました。でも、いまは、ウルトラマンやかめんライダーごっこがだいすきです。わたしのおかしもたべてしまうほどげんきいっぱいです。

ことしの六がつごろに、ママのおなかのなかにあかちゃんがいることがわかりました。すぐくうれしかったです。

でも、ずっとママのげんきがないひがつづいて、しんぱいとふしぎでいっぱいになりました。あかちゃんは、どれくらいのおおきさなのかな。おなかのなかでなにしているのかな。まいにちままとあかちゃんのはなしをしました。

ママとわたしがつながっていたへそのおをみせてもらいました。

へそのおでママからげんきをもらっていたことがわかり、ママに

「ありがとう」といいました。

ママは、おへそからげんきをおくりながらわたしやたいちをたいせつにそだててくれました。

いまは、うまれてくるあかちゃんにいっしょうけんめいげんきをおくっています。びょういんでおなかのなかのあかちゃんをみせてもらったとき、あたまやあしがみえて、おねのところがピクピクうごいていました。わたしやたいちといっしょでいきているんだなとおもいました。

あかちゃんがうまれるまで、とてもながいじかんがかかります。どんなかおかな。おんなのこだったらうれしいな。いろいろかえるけど、いまはげんきにあえたらいちばんうれしいです。

だから、あかちゃんにてもがみをかきます。

あかちゃんへ

はやくあいたいな。ママからたくさんげんきをもらっておおきくなってるね。ずっとたのしみにまっています。にいには、いたずらがだいすきです。ママはおこるととてもこわいです。わたしとばばはともやさしいので、あんしんしてください。かぞくみんなであなをまってるね。

教育委員会賞

私の大好きなおじいちゃん

中井町立中村小学校

六年 伊藤 すみれ

私のおじいちゃんは、私が生まれるずっと前にガンになりました。私が年長の時に一度だけ入院しましたが、退院してからはずっと元気なおじいちゃんでした。それでも、おじいちゃんの体には、あちこちにガンがありました。

今年の二月頃、背中にもガンが見つかりました。それが大きくなって、おじいちゃんの足の感覚はだんだんにぶくなってきました。それでも、治りようやりハビリをすれば、きっと良くなる、と思っていました。おじいちゃんの口から、「もう治らない」と聞いて、とても悲しかったです。悔しかったです。テニスが大好きなおじいちゃん。私も運動が大好きなので、足が動かないって考えただけで辛くなりました。

おじいちゃんが毎日泣いている、とおばあちゃんから聞いて、私はおじいちゃんのために何かしたい、と思いました。クッキーを焼いて、家族で会いに行きました。

久しぶりに会うおじいちゃんは、家の中では歩行器を使って歩いていました。一緒にお散歩に行きました。お散歩には車いすで行きました。マシオンにはエレベーターがついているので、一階までは車いすに乗ったまま

行くことができました。その後、路上に出るまでに階段が五段あります。たった五段の階段を降りることがとても大変でした。おじいちゃんが手すりを持って体を支えている間に動かせない足を運んであげます。その時におじいちゃんが転んだりしないかと、とても心配になりました。用意しておいた車いすに乗れた時にはホッとしました。いつもはおばあちゃんが一人でお散歩に連れて行ってくれていると思うと、胸がぎゅーと痛くなりました。車いすのお散歩は思ったよりもずっと難しかったです。ちょっとした段差でもつまずいたり、坂道では早くすすんでしまったり、曲がりたい所でうまく曲がれなかったりしました。車いすに乗る人が不安な気持ちにならずにお散歩を楽しめるように考えながら、車いすをおしてあげることが大切だと思いました。

五月ごろには病気がどんどん広がり、ほとんどの時間をベッドで過ごすようになりました。おじいちゃんはおばあちゃんと二人暮らしです。あの日の夜おそく、おじいちゃんがベッドから落ちてしまいました。おばあちゃんの手では持ち上げることができなくて、その夜、おじいちゃんはそのままだでねたそうです。そのことを、よく日電話で聞いた時とても悲しい気持ちになりました。はなれていても、すぐに助けに行つてあげたかったです。

次のお休みに、おじいちゃんに会いに行きました。みんなでぎょうぎを作つて、弟と私が焼きました。とても上手く焼けたし、何より、おじいちゃんが喜んでくれたので、本当にうれしかったです。

しばらくして、おばあちゃん一人ではおじいちゃんのお世話をするのが難しくなってきました。私の家におじいちゃんとおばあちゃんに来て

もらおう、と家族で話していましたが、それはかないませんでした。

おじいちゃんが入院することになりました。もうちりょうすることはできないので、病気から来る痛みで苦しんでいたための緩和病棟です。十二才以下の人は病室に入れませんが、それでもおじいちゃんの具合が悪くなった時、病院にお願いして、「ガラス越し面会」をさせてもらうことができました。学校の話や、習い事の話喜んで聞いてくれました。運動会でやったとう立や、ブリッジを見せたら、手をたたいて笑ってくれました。帰り際、おじいちゃんに、「足は大切にしてくね。」と言われました。今まで自分の体の事はあまり考えていませんでしたが、おじいちゃんを安心させたい、と思うようになりました。

最近のおじいちゃんは、ついこの前のことも忘れてしまうようになりました。いつか私のことも忘れてしまうんじゃないか、と思うときびしいです。でも、おじいちゃんは私の心の中に大切な思い出をたくさん作ってくれました。もし、おじいちゃんが私のことを忘れてしまっても、私は絶対に忘れません。ずっとずっとおじいちゃんと一緒にいたいのです。今はそばにいたことができなくても、好きな音楽の話をしたり、学校や読んだ本の話をしたいです。おじいちゃんが好きな料理をたくさん作ってあげたいです。今までおじいちゃんがしてくれたことを、これからは私がしたいです。

大好きなおじいちゃんが、どうか、げんきになりますように。

神奈川新聞社賞

夜に輝くセミを見て

平塚市立真土小学校

六年 加藤 巧海

「ジージー」。夏の暑い日に、セミは鳴いています。小さな体で、家の中まで泣き声が聞こえるほど力強い声を出します。ぼくは、セミの生命力を感じたので、夜の公園に行き、セミの羽化を観察してきました。そこで、幼虫から成虫になる姿を目の前で見、ぼくは、まばたきすることを忘れるほど、美しい姿にみとれました。また、一生けん命羽化する姿を見てセミの命の意味を感じることができました。

はじめに、セミの幼虫が土の中からはい出して、木の幹に向かって歩いている姿を見ました。幼虫の大きさはぼくの親指の頭位の大きさで、ぼくの背より高い所に登って行きました。人間でたとえると東京タワーの半分におよぶ高さです。ぼくは、小さな体で登る姿に、たくましさ、勇気と、あきらめない心を感じました。ぼくは、がんばれと心の中で応援していました。

次に、脱皮している姿を見ました。背中の部分のからが割れて中から白い体が出て、しだいにふっきん運動のように起き上がり全身が出てきました。まっくらな夜の世界に、青緑色にかがやく

羽を下ろし無動で、ぼくは、「宝石のようだ」と言葉ができました。羽化した姿は、エメラルドのようで、神秘的と表現する、ぼくが見た事のない本当の美しい姿でした。幼虫との姿の違いに感動しました。

セミは、幼虫として土の中で二、六年、成虫として地上で一、二週間の命と言われています。地上での短い期間、オスは大きな声で鳴く役割をまっとうします。今回セミを観察して、セミの生命力の強さと、一生けん命生きる姿を感じることができました。どんな生き物にも、命があります。先日、学校の授業で、命の尊さについて考えました。印象に残った話は、担任の母親が亡くなり、悲しくつらい思いをした話でした。ぼくは、道に落ちていた子すずめを保護した時、子すずめが亡くなってしまい、涙がポロポロ流れ悲しみを感じました。身近な生き物を失うだけでも悲しむ人がいます。セミも子すずめも人間も皆命があります。一生けん命生きている生き物たちのように、ぼくはいろんな事にチャレンジして、一日を大切に過ごしたいです。家族や友人、恩師、時間を大切にしたいです。なぜならば、一度の人生、ぼくは、たった一つの命です。この命が欠けたら悲しむ人がたくさんいます。命は生きること、そしてみんなの力で生きれていることを感じました。今回セミの羽化を見ることができて本当によかったです。また、セミは自分の力で成虫になりますが、ぼくは今でも自分一人の力では生きていけないです。お父さん、お母さんにありがとうと伝えたいです。

↑V↑K賞

使命

南足柄市立岡本中学校

二年 山野 弥花

私は、死のうと思っっている時があった。毎日部屋で泣いていた。そんなときに出会ったのが、「推し」の存在だ。その人は想像がつかないくらいに辛い過去をもっていて、それでも今を全力でがんばっているところに惹かれた。その人は歌い手で、たくさんのボーカロイド曲を歌っていた。その中に、「命に嫌われている。」という歌があった。その歌は、誰にも苦しいことを言えず、死ぬ勇氣もない私のかわりに辛いことをさげんでいるようだった。そして、最後の歌詞は、「生きる。」というシンプルなものだった。そんな簡単な言葉だけど、初めて聴いたときの私は涙がとまらなかつた。コメント欄をみると、私と同じような気持ちをもちょうな人がたくさんいる、仲間がいる。それに気づいてさらに涙が出ていた。私は推しや同じ気持ちをもつ人たち、そして「命に嫌われている。」を作った人に救われた。

それから、のろのろと意味もなく生きていた私は、夢をもった。それは、誰かを救える歌を作る人になるというもの。医者は、体の調子が悪くて生きてたくても生きられない人を救う仕事だ。でも私は、心の調子が悪くて生きてたくても生きられない人を救う人になりたい。誰かを救える日まで、私は生きなくてはいけない。

神奈川県PTA協議会会長賞

病気になってわかったこと

茅ヶ崎市立東海岸小学校

四年 鈴木 壮

ぼくは、昨年の四月から六月に入院をした。

じんぞうの病気がわかって、熱が下がらなくて、いろいろな薬を使った。入院している間は、とにかくつまらない。友達と遊びたいと思ったし、食べたい物が食べられなくて、もし退院したらラーメンを食べまくって……という想像がどんどんふくらんでいった。学校のみんなはなにをしているのかな。遠足に行ったりしているのかなと思った。五月に一回退院できたのに、また二週間したら熱がでた。まさかすぐに二回目の入院をするとは思わなかった。

手じゅつをしないとわからないことがあったから、七月に手じゅつをすることにいった。どんな手じゅつなのかわからなくて不安な気持ちだった。手じゅつ室に入る時はとてもこわかった。おしっこがもれるようなきょうふを感じて、あいぼうのETの人形をもって入った。六時間の手じゅつは無事に終わった。

その後の入院の間はきずがめちやくちやいたくて、二日間でプリン一つしか食べられなかった。夜でもいたみ止めの薬を飲みまくった。いたみがやわらぐから、夜中でもマンガをずっと読んでいた。

となりに入院していた六さいの男の子がいた。カーテンの向こうから話が入ってきてその子ががんと言う病気だとわかった。「秋に他の病院へ行つてちりょうを続けること」といつになったら退院するの?とお母さんとしゃべっていた。四日間入院している間、その子とお母さんの話が毎日聞こえてきた。泣いている声も聞こえる。ぼくは、へその下のきずがいたくて、話をするのも辛かったけど、自分の病気は大したことないからがんばろうと思った。三日目、朝ごはんはたまご焼きとベーコンが出た。今までの朝ごはんの中でも、とんでもなくおいしく感じた。

今年の夏で手じゅつをして一年がたった。今でも手じゅつの時のきょうふをわすれない。病気をする前も命を大切にしてきたけど、今はもっと大切にしようと思っている。ぼくは病気になって、死ぬかもしれないと思ったときに、命の大切さがすごくわかった。命はさわれないし、見えない。でも、エネルギーのかたまりで、体を動かす原動力だ。だから今できることを最大げんががんばろうと思っている。病院でとなりだった子も元気になっているといいな。

ともに生きる社会かながわ憲章賞

一人一人の人権が尊重される社会へ

三浦市立初声中学校

一年 渡邊 恵

私は道徳の授業で、「傍観者でいいのか」という物語を読みました。その物語は、人権について深く考えるきっかけになりました。私が思う人権は、一人一人が尊重され、意見を言える権利を持つことだけでなく、自分だけのことのほか、権利をもつことで、人を助けることだってできるということだと思っています。「傍観者でいいのか」という物語では、登場人物として、Aさん、Bさん、Cさん、クラスメイトと私が出てきます。Aさんは、Bさんの言いなりになってしまっていて、日に日にヒートアップする人権侵害と疑われるようなBさんの行動があり、平気でAさんをつらつかつたり、命令したりするようになってしまいました。それを見ているクラスメイトの中には、Bさんと一緒にからかい、笑う人まで出てきてしまいました。一学期の終わり頃になるとAさんは、体調不良をうったえ、早退するようになってしまいます。放課後、掲示物をなおしていた「私」は、思いをつめたような顔をしているCさんに、「Aさんをこれ以上放っておけない。」と言われ、はっとしました。このことがきっかけで、休んでいるAさんの家に、Cさんが事情を聞きに行くと、「いじめられるのはつらい。もう学校へは行かない。」と言い、Bさん達から言われたことを断ると、殴られたりしていることを、涙を流しながら教えてくれたそうです。この話に出てくる、見て見ぬふりする人(傍観者)は、そのままにしていいのか、はやし立てる人(観衆)は、もっと状況を悪くしていいのか。

人権侵害(いじめ)には、加害者だけでなく、たくさんの人が関わっており、一人一人、人間として生活する

上で欠かせない、とても重要で大切な権利や自由を、Aさんはおびやかされてしまっています。Bさんをはやしたてる人たちも、加害者だと思ふし、絶対にあつてはいけないことだと心の底から思いました。又、傍観者が、そのまま放っておくことは、意味を変えれば、見捨てているとも言えると思いました。目の前で友達がいじめにあつていたら、見て見ぬふりをするのではなく、助けてあげることが大切だと思いました。人助けは難しく、最初は怖いかもしれないけれど、人助けに失敗はないのではないかと思っています。だから、どんなに小さなことでも、人助けをしようと思えました。そして残念ながら世界はまだ、少なくとも一人一人の人権、全ての人が尊重され、意見を受け入れてもらえたりするような社会ではなく、人権をおびやかされたりしている人もいるということ、常に頭に入れておきたいと思えました。テレビのニュースを見ると、人種差別などは、まだ世界からなくなっていないままです。SDGSの持続可能な開発目標の一つには、目標十として「人や国の不平等をなくそう。」というものがあり、その目標達成のため、人種差別をなくそうとしている取り組みもあります。このような取り組みが始まると、一人でも多くの人に人権や自由が手に入り、人権をおびやかされずに生活してほしいという気持ち、より一層深まりました。世の中でも、人権に関する取り組みも増えて行き、良い未来へ進んでいけるような気がして、素晴らしいことだと思います。

私は、この学習を通して、人権とは何なのか、人権の大切さ、重要さが身にしみてわかりました。そして私自身、加害者、観衆はもちろん、傍観者にもなりたくないと思えました。先程書いた通り、人助けは難しいけれど、支えてあげることができたり、相談に乗ることができたり、人によってそれぞれの助け方ができるということがわかりました。被害者にとって、少しでも気持ちに楽になるような世界や、全ての人の人権

が尊重される、素敵な未来をつくっていくためにも、私たちに何ができるのか、など、よりよい未来のためにどうしたらよいか、「今」でできることについて考えていきたいと思いました。

優秀賞

今を、生きる

伊勢原市立中沢中学校

二年 石坂 まり

私には大好きな祖父がいました。その祖父に病気が見つかったのは私が小学二年生になった頃でした。肺に癌が見つかり、あまりに突然で私はとてもおどろきました。ですが、まだ癌も小さかったので、治すことはできると聞き、あまり重く受け止めることはなく、その後も家族全員、いつもどおり、普通に過ごしていました。そんな日々もつかのま、祖父に癌が見つかり半年ほど経った頃、癌のレベルが上がリ、今まで入院していなかった祖父も急きょ入院することになりました。そして私たち家族はお医者様からこう聞かされました。「余命は一年。」

それから、本当に月日がたつのが早かったです。私は小学四年生を終え、五年生となる前の春休みでした。私の大好きだった祖父の笑顔と自分までつかれてしまうような笑い声はどこへやら、祖父は、鼻に管をつけ、酸素ボンベで酸素を送らなければ、自分で息もできないほどに弱っていました。もうダメか、と思われた頃、病院で見舞いに来ていた私たちに話すこともやっつとだという状態なのに、祖父は今にも消えてしまいそうな小さな小さな声で

こう言いました。「家に帰りたい。．．．最後に家の．．．桜が見たい．．．。」と。お医者様も何かを察してくれたようで、家に帰すことをゆるしてくださいました。

そして、家族全員で祖父の家へ帰り、私は祖父をつれ、家の外にある桜のもとへ行きました。丁度、桜が満開の季節でした。「綺麗だね。」と言った私の横で祖父はただ桜をながめるだけで、何も言いませんでした。ですが、久し振りに祖父がほほえみしました。

その翌日、私が朝起きた頃には祖父は天国へと旅立っていました。祖父は、「余命一年」と言われたあの日から二年半も生きました。祖父は最後まで一生懸命でした。手を握った時、その時の精一杯の力を振り絞り、手を握り返してくれました。そこから「生きたい」という祖父の切なる思いが見えたように感じました。人は生まれたら、そこから死に向かって歩いていきます。ですが「生きたい」という思いは、人をこんなにも強くするのかと思いました。

いつか訪れるその日まで、この日々が一日でも多く続くよう願いながら、今を生きていきたいと思えます。

優秀賞

「母牛が教えてくれたこと」

神奈川県立相原高等学校

一年 堀内 桐子

今年の春、私は第一希望であった相原高校の畜産科学科に入学することができました。他の高校には無い特徴ある学校生活に対して希望と楽しみな気持ちで胸がいっぱいでした。

入学して約一ヶ月後、部活動体験を経て畜産部の牛プロジェクトに入部しました。初めてのことばかりでわからないことが多く大変でしたが、毎日が充実していました。入部して数日経った五月四日、運良く牛の分娩に立ち会うことができました。二次破水が始まって約一時間程で大きな子牛が生まれました。動画でしか見たことのなかった分娩を生で見ることができ、感動と嬉しい気持ちが進み上げてきました。それと同時に、今後の子牛への期待が大きくなり膨らんでいきました。その後、子牛はもの凄く速さで成長し、今では百キロを優に越えています。また以前から、先生方や先輩から夏は出産ラッシュがあるという話を聞いていました。そのため、これからまた可愛い子牛をたくさん見ることができると胸を躍らせていました。この時の私は、出産には常に危険を伴うとあまり感じていませんでした。

そんなある日、ある一頭の母牛が二週間ほど早く深夜に早産してしまっただけです。朝の管理で発見した時には、すでに子牛が亡くなっていました。羊膜に包まれている子牛と、頭だけが出ているもう一頭の子牛がそこにはいました。狭い牛房の床には母牛の

もがいた足跡が残っていて、想像を絶する痛みがあったんだと心が苦しくなりました。分娩準備の整っていない中でたった一頭、夜中に痛みと戦っていたのを想像すると早産の前兆や異変に気付く事はできなかったのか？と自分の中に後悔する気持ちが大きくなりました。それだけに溜まらず、母牛が靱帯を損傷してしまい起立不能になってしまいました。母牛の横たわる姿を見て、どうして子牛だけでなく母牛までこの様な目に遭わなければならないのか？と次々に疑問と不安が胸に込み上げてきました。

数日後、先生から「様子を見て回復の見込みがないと診断された場合は、と畜場へ出荷することになる。」と伝えられました。ただ、一生懸命世話をし、できる限りのことを行えば治るだろう、と安易に考えていました。しかし、状況は良くなりませんでした。一週間経っても母牛は自立することができず、カウハンガーという牛を吊り上げる装置が無いと立つことができませんでした。そんな状態が続く日々不安と焦りが積もっていききました。薄々気付いていましたが、八月二十二日にと畜場への出荷が決定してしまいました。自分ができることは、出荷当日まで母牛が過ごしや

すい環境を作ることだけでした。そして、二十二日当日の早朝、運ばれていく母牛を見てこのような形で出荷するのは、とても悲しくとても悔しく思いました。

この日は私にとって、命と向き合う過酷さと経済動物の命について深く学ぶ機会となりました。日々の世話を真摯に取り組むことこそ、目の前の命を大切に扱うことになるのではないかと思いました。それが、最後の見送りの時に自分の悔いが残らないことにも繋がるものだと思いました。

優秀賞

父への思い

大井町立大井小学校

五年 諸星 瑠花

四年前、命の大切さを教えてくれたのは、祖父の死だった。私は、去年それ以上に大切な父を亡くしてしまった。祖父の時は、命は大切だなど思ったけど、父の時は、こんなにはやく人生が終わってしまうなんて、父の人生はなんだったんだろうという気持ちが強くなる。自分の命がなくなったら自分だけではなく友達や家族も悲しい気持ちになってしまう。四年生で父を亡くす人はあまりいないと思う。母は、父が亡くなってすごく悲しんでいる。だから私は、父が生きている時にしなかった家のお手伝いを始めた。家のお手伝いをしんげんにやり始めてからみんなに、

「えらいね。」

と言われるけど、私はほめられるためにやっているのではない。母の役に立ちたいのと、父に、

「がんばれ。」

と言われるような気がしたからだ。父は、私のおるすばんの時、毎回電話をかけてきて、

「大丈夫？さみしくない？」

と言ってくれた。たまに、お仕事の休けいのおかげで帰って来て、お昼ごはんと一緒に食べてくれる父が、本当に大好きだ。

でも、父が死んでうらんだことは今でもない。それは、家族のために一生けんめい働いてくれたから。

私が生まれて一番うれしかったのは、母と父が、たん生日の手紙に、

「生まれてきてくれてありがとう。」

と、書いてくれていたことだ。それなのに、父とは九年間しか一緒にくらせなかったのが、一番つらい。

「また、一緒にくらしたい。もう一度最初からやり直したい。」

これが私の願いだ。私の人生は、本当に幸せだ。温かい家族に育てられて、兄はいろいろ物を買ってくれて、姉は恋の相談やテレビを見てくれ、母は信用してくれて、愛してくれて、父は、一番かわいがってくれる。うちの家族はみんなやさしさにあふれている。

父が亡くなって、私は、がまんがふえた。泣いてしまうと、母も泣いてしまう。だから最近、母もいない一人の時に泣くようにしている。悲しくなったら父の

「大丈夫だよ。」

の言葉を思い出して、自分の心を元気にしている。

私は、父のことをそんけいしている。子どものために、なんでも買ってくれて、みんなを愛してくれて、私は、しょうらい父みたいなやさしい人になりたい。うちの家族は、みんながんばりや

さんで、それが父に似たところだと思う。父がワクチン後にたおれ病室へむかうと、なみだがたくさんあふれた。私は、父とすごした大切な時間や、父のやさしい笑顔を絶対に忘れないで、これからの人生を楽しく生きていきたい。

「パパへ、ママのことは、瑠花が支えるからゆっくり休んでね。大好きだよ。」

優秀賞

食べることは生きること

平塚市立港小学校

三年 村田 弘乃介

ぼくのジジは、七月七日から入院をしていました。

「ジジ、ごはん食べたかな。」

「かんごしさんは、今日も食べてないって言っていたよ。」

ぼくは、毎日ママに聞いていました。七月十一日からジジは、食欲がないと言ってごはんを食べなくなってしまったそうです。そして、身体を動かすことができなくなってしまい、メールが届かなくなりました。

「ごはんを食べないジジなんてにせものだ。」

とぼくは思いました。

「ママ、ジジに会いたい。会わせて。ぼくがごはんを食べてってお願いをしたら、きっと食べてくれるから。」

いつだって、ジジはぼくのお願いをきいてくれます。ぼくは、はりきりました。

ママは病院にたのんでテレビ電話をつなげてくれました。画面にうつったジジは、ほっぺたがへこんで別人でした。

「ジジ、ごはんを食べて元気になって。夏休みにいっしょに遊ぼ

う。」

こんしんのかでさけんでも、ジジは声を出してくれませんか。最後にうでを上げて、手をふってくれました。これは、まいったぞ、まるかわりだとぼくは思いました。入院してすぐは、学校の給食みたいな病院の食事の写真をとって送っていました。

「病院のごはんは、おいしい。」

というコメントもついていました。ジジは、ごはんを食べることが大好きです。朝は、ぼくと起きる競争をします。ぼくは、早起きをするが一番好きなテレビを見ます。ジジは、ぜったいに朝食を食べます。それから庭に出て水をまき、野菜のしゅうかくをします。

七月三十一日、ジジは死んでしまいました。水分の点できだけで、二十日間ののちをつないでいました。一カ月の入院で病気は治る予定でした。

「ジジは何で死んじゃったの。」

何度もママにたずねました。病気のこともとたくさん説明をしてくれたけれど、

「ごはんを食べなかったからかな。」

と下をひいて言っていました。そして、お茶わん山もりにごはんをよそって、だんごを六個作って死んだジジのまくらもとに置いていました。

ママのいのちの授業は、納得できないことばかりでした。お医者さんとの話にも連れて行ってもらいました。大人四人が難しい

顔をして首をかしげていました。ぼくは、大きな病院でも治らない病気があっておどろきました。ごはんを食べたい気持ちにさせる薬もないそうです。もうジジには会えないけれど、ジジが植えた野菜はすくすく育っています。ぼくは、苦手だったモロヘイヤも食べました。もうすぐサツマイモのしゅうかくです。庭の柿の実も大きくなってきました。ごはんを食べるジジの姿を思い出しながら、仏さんにおそなえをしようと思います。